

# 若手・中堅教員が構成する見取りプロセスに関する探索的考察

修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによる仮説モデルの生成

An Exploratory Study on *Mitori* Process Constituted by Early-career and Mid-career Teachers:

Generating a Hypothetical Model Using the Modified Grounded Theory Approach

西塚 孝平

NISHIZUKA Kohei

東北大学大学院教育学研究科, 日本学術振興会特別研究員 DC1

Graduate School of Education, Tohoku University & JSPS Research Fellowship for Young Scientists

Key words: 見取り、形成的アセスメント、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ

## 目 的

教師の果たすべき役割においては、子どもをいかに知り理解できるかが、より良い発達を導くうえで重要だとされ、「子どもを観る目の正確さ」に専門的力量的の核心があるともいわれてきた。とりわけ、子どもの姿を正しく理解し、学習ニーズを根本から特定したうえで、的確に改善していく働きかけは形成的アセスメントとして定義されている。しかし、この形成的アセスメントの計画と実行には相当程度の難しさがああり、研究者や教師がアセスメントの正確な知識と理解に欠けている点がこれまで問題視されてきた。最近の国際比較研究は、形成的アセスメント観の基盤を成すコミュニティ特有の社会文化的文脈に注意を払うように推奨している。そこで本研究では、日本の学校の教師が、日本のアセスメント観を具現する「見取り」と呼ばれる実践知をどのように意味づけ文化的に機能させているのか、というプロセスの構造を、現職教員の視点から探索的に検討することを目的とする。

## 方 法

見取りの構成概念とプロセス構造を捉える方法論として、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) を援用した。SNS による告知などを通じて、日本の現職教員に調査協力を依頼したところ、学校種や教職年数の異なる 12 名 (男性 10 名・女性 2 名、教職年数の幅は 1~22 年目) から協力を得た。インタビューは、2021 年 11~12 月にかけてオンラインでおこなわれた。インタビューでは、アクティヴ・インタビューの考え方を取り入れた半構造化面接法の形式をとった。質問の作成意図は、見取りに対する多様な意見を表出してもらうこと、見取りの手続きを具体的に明示してもらうこと、見取りに作用している要因や見取りが影響を与えている事柄を明らかにすることであった。インタビューのやりとりをすべて文字起こしし、NVivo Windows で作成した M-GTA 用分析フォーマット上でデータ分析を進めた。なお本調査は、東北大学大学院教育学研究科内研究倫理審査委員会の承認を得て実施されたものである (ID:21-1-045)。

## 結 果

インタビューの平均時間は 1 人あたり 1 時間 15 分であった。データ分析は、具体例を豊富に含んでいると思われた教師のものから開始した。2 人の分析を残して新たな概念が生成されなくなったため、データの追加収集は必要ないと判断した。最終的に 200 の具体例、38 の概念、16 のカテゴリー、4 の《中心のカテゴリー》が得られた。「若手・中堅教員の見取りに関するプロセスの研究」を分析テーマとしたストーリーラインは次のとおりである。若手・中堅教員による見取りは、《特定の信念を持つ》ことから始まる。それは、子どもと関わることに感謝や縁、喜びを感じることに、謙虚な姿勢で子どもの多様性を尊重し、彼らの尊厳を守ること、子どもを知ることの曖昧さに耐え、不完全さを受け入れることなどである。こうした信念の下、子どもとより良い関わりを築くために、《子どもとの関わりを可能にする空間を形成する》。空間とは、子どもの姿を捉える網の大きさであり、教師の手が届く範囲のことである。子どもとの信頼関係、教師の同僚性、教材研究の充実を通して、網の目がきめ細やかになおかつ広がっていくと、教師は、子どもが宿している教育的価値の高い事実を取り上げることができる。《空間内で教師と子どもがふれあう》段階では、見取りをおこなう場を教師と子どもが共有する。場の共有方法には、教師が子どもの事実を直接つかみにいく「入り込み」、子ども自らが事実を教師に開示するように誘う「引き込み」、心理的・物理的距離を設ける「間合い作り」の 3 つがある。この中で教師は《認知を働かせる》ことになり、仮説 (予想される子どもの姿) や視点 (注意を向ける先) を設定し、困り感を発見した後、改善策の検討および実行へと移行する。以上のプロセスは、単方向性ではなく循環性を有していることも確認された。

## 謝 辞

インタビューにご協力いただいた皆様に心より感謝いたします。なお本研究は、JSPS 科研費 20J20092 の助成を受けたものです。